

集

俳句フォーラム

2019年7月 第12号

白山句会

和の国

平野無石

和の国の今が幸せ浮寝鳥
初富士を笠雲迅し浦日和
日の廊に老と仲よきかじけ猫
飢え戦禍越えて今日あり下萌ゆる
四方に伸びる影向の松椿東風

影向の松

都築繁子

閻魔堂の造花の供花や初明り
影向の松の偉容や春疾風
紅梅やびんずる尊者の足撫でる
土筆摘み遠き日思う河川敷
セピア色の思い出春の昭和館

影向の松

植木やす子

切炭の竈は遠し昭和かな
風に揺れ早咲き桜土塀際
片づけも意にならぬまま寒に入る
小岩にも四国霊場椿咲く
影向の松歳重ね春寒し

星住山善養寺

田中藤穂

昨日脱ぎ今日また着込み梅見月
見はるかす江戸川の土手つくしんぼ
春の雲寺内に四国遍路道
おびんずるの鼻撫でてをり春の寺
マクドナルド春のサラダをたつぷりと

春寒し

工藤はる子

長き坂登り切りたり春ミモザ
どこいこう話ばかりの春の旅
髪うすき夫の背中や二月尽
入院の話も尽きて草の餅
キヤンバスに描きかけの絵や春寒し

影向の松

篠田純子

春疾風老松の枝波打てり
すぐ尽きる遍路道なり善養寺
弥生いよいよやマクドナルドは初体験
ムスメ双六アガリ花嫁昭和館
ふどし姿の徴兵検査余寒なる

昭和

大山夏子

失せ物の出ずと御神籤冬桜
甕の底に潜む越冬めだかかな
ちやぶ台に昭和のくらし冴え返る
春寒し遠くて近き昭和かな
ふらここに乘って少女に戻りゆく





机の節

渡辺節子

蟹雑炊人それぞれの思いこめ
小豆粥亡き母愛でし椀に盛る
涅槃西風ビルマいまごろ夕日落つ
春眠や寝釈迦の睫毛揺れ給う
卒業日机の節をそつと撫で

無瑕

大山夏子

初夢も何故か俳句という遊び
門前の市の賑い椿餅
マンションの防鳥壁や日脚伸び
遠くとおい三月十日火の記憶
空は無瑕白木蓮の輝きて

逢魔時

中川のぼる

短日の逢魔時や振り返る
純情や野暮な時分の古日記
くだら野の鴉鳴き飛ぶ奇怪に
挿木して命の神秘いのりつつ
風音を編み込む黄色土佐水木

邪宗門

江口九星

邪宗門の青春遠く春立つ日
大寒や闇夜なれども星二つ
もず孤高枝先で世を見渡せり
賀状来たそれが最後の月明かり
人生の影と輝き冬銀河

北国

伊藤昌枝

鋭角に尖る大地の寒さかな
雪礫の時間差で来る直球
雪女郎そろそろ巡る時節かな
早春のうた北国はまだ雪の中
長屋門ふわり飛び出す紋白蝶

名残雪

楠本和弘

タイヤ磨き翁年の瀬松山へ
初日の出故郷の波音届くかな
時流る屏風ヶ浦の冬の鳶
名残雪打ち捨てられし鮫二体
尺八の音色緩急雪解川

卒業

吉宇田麻衣

六年間皆勤の君卒業す
まだ眠そうごかぬ蛙そつとして
なやらいに鈴なりの人空望む
安息は束の間となり年くるる
寒稽古急ぐ姿に気をもらう

門限

渡部恭子

在るがまま紅深くする枝垂梅
雛飾る手に目に小さき好奇心
鳩時計少し弾んでおでん煮る
桜鯛はたと眼の合いお食い初め
春の星今は門限なき身なる

さくら貝

小沢えみ子

白菜漬水気をしぼる掌のかげん
村のバス一向に来ず梅香る
耳元で二度三度振る種袋
さくら貝あれは初恋遠き浜
友の声聞こえて来そう彼岸入

鮫肝

酒井たかお

拳ほどの初富士を置くスカイビュー
矢の刺さる鴨のあわれや初閻魔
牡丹雪幾何学模様の門扉かな
春の雪鳩の足跡点々と
鮫肝と熱爛常陸の旅はじめ



円の会

還る

山田邦彦

窓には星のイルミネーションおでん鍋
行く年の闇のかなでる波の音
成人の日に寄る学校の兔小屋
立春の回転扉日の匂い
四温かな放れば戻るブーメラ

命

若泉真樹

天狼星の時空編込む糸玉
沈むもの鎮めて谷の冬籠
万象の命とともに除夜の鐘
愛憎のいずれも我が身去年今年
傘寿なる三日平成最後なる

大緋鯉

石川東兎

臙月万葉恋歌読み返す
大緋鯉池底はなるる四温かな
寒明けや卒路の旅を企てむ
待ち侘ぶる名のみと言へど春立つ日
冬灯下机上を占むる大漢和

吉野雛

大山夏子

初詣産土神へ着替えて
冬至湯の柚子をふやせばにこにこ
白加賀てふ梅の気品やいとおしむ
梅白しいつしか亡母傍らに
吉野雛亡母の形見足るを知る

傍観者

日置涛魚

寒波来る背筋を伸ばす虚栄心
鏡凍て髪一筋も許せぬ日
踏みしだく朽ち葉やいつも傍観者
羽目外そう春一番が吹く日なら
醒めるまで幸せでした春の夢

春霞

仁上博恵

年用意の墓参は青き空つれて
爪木崎群れて孤独か水仙花
立て看の撤去論争春嵐
春霞舌が記憶のちらし寿司
紅色に黄をたらし込み春を曳く

山笑ふ

重原爽美

意のままにならぬ老体山笑ふ
四ヶ月の光る小川や水の韻
花権を蒔き終え軽く手をはらふ
揚げ雲雀励めと吾にしきり啼く
耳しいに雲雀懸命喘きくれし

平成

小笠原妙子

葉の奥に瑠璃の孤独や竜の玉
佳き人に会ひし佳き日の冬桜
緋寒桜世界遺産の礎続く
木菟の啼かず迷子や街に死す
平成終る平和を祈る内裏雛

おでん鍋

三羽永治

淑気満つ馬のたてがみ艶やかに
濃餅汁具沢山なる小さき手
寒牡丹記憶の中の母と会ふ
変る世の変らぬ風味おでん鍋
万物に光の恵み山笑う

終わる平成

治部少輔

日記買う我が身の過信諫めつつ
身の丈の終活なれと枝を打つ
平成に何を成したか懐手
いざ行かんフロントグラス冴えかえる
油断した薄着悔やまる戻り寒

免罪の門

中山未奈藻

雛祭口紅真紅に変えてみる
去年今年現代社会の頁繰る
ユーラシアの最西端や冬鷗
紅白梅そつと手つなぐ老夫婦
免罪の門改装し春を待つ